

平成30年6月17日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K17442

研究課題名(和文) 美術教育の映像メディア表現の扱い方に関する理論と実技指導方法について

研究課題名(英文) A theory and instruction of the method for dealing with Image media expression in art education

研究代表者

渡邊 美香 (Watanabe, Mika)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30549100

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、美術教育における映像メディア表現の指導方法の基礎を理論化し、芸術表現における色彩や光、空間、時間の視点と感情面を結びつける指導方法の構築を行った。授業実践の検討から、映像メディア表現を通して子どもは自分らしさや感情を表し、空間・時間に対する造形的な見方を獲得し深めている事を確認した。知性と感情の統合された表現を生み出す映像メディアの扱い方について、理論と実践から明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Image media expression became a content of Art in the course of study of junior high school in 1998 in Japan, as expression using photograph, video and computer. At present, full of moving images exist in our life and students have some occasions to use a media on an art class. We need a teaching method for dealing with image media expression in order to cultivate student's creative mind.

The purpose of my research is to consider the possibility of the media as a material in art education that contributes to the development of the creative mind. I observed demonstration exercises of art classes in elementary school, in junior high school and in university. We found a student's creative thinking of image media expression in these works and in these making process.

研究分野：美術教育

キーワード：美術教育 映像メディア表現 時間 空間 インタラクティブ・コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

現行の中学校美術科の学習指導要領に「美術の表現の可能性を広げるために、写真・ビデオ・コンピュータ等の映像メディアの積極的な活用を図るようにすること」という記述があるように、今日美術教育において現代美術の新たな手法やメディアを指導内容に盛り込むことが求められている。新たなメディアをどのように指導するのか、単なる機材の技術的指導に偏ることなく、知性と感情の釣り合いのとれた表現を生み出す方法が必要とされる。

申請者はこれまで「抽象表現」に着目し、教師が現代美術に親しみ題材を考えることができるようモダン・アートの見方と現代生活をつなぐ実技指導方法の構築を試みてきた。特に、作品の外見や技法からではなく、実際に表現しようとする制作者の発想を辿り、表現を用いる制作過程を考察し、「抽象表現」の技術の基準を見える状態に理論化することで実技指導を可能にする着想を得た。そして、「抽象表現」は、感性を育む美術教育の目的に適しており、ものの見方と技術が同時に獲得される題材として教育現場に提案できることを明らかにした。「抽象表現」の実技指導方法の有効性について研究を進めるなか、中学生を対象にコンピュータをはじめとするマルチメディア表現題材の検討を行った。中学生は、身体的に様々な道具を使いこなすことができ、表現に対して挑戦する意欲があり、現代の多様なメディア表現への関心から自分の感性を発揮できる可能性を持っていた。このような実態から、道具や材料を操作し、色や形などの造形要素を用いて感情などの視覚メッセージを表すことと、心の成長と結びつき豊かな人間性を育むこととを関連付けた映像メディア表現指導の基礎を提案できるのではないかと考えた。造形活動は、学習者の思考そのものを形づくるものであるが、つくられたものに対する責任感を養うものでもあり同時に規律を伝えることが可能になる。この時、一般的に造形活動は手仕事として強調されがちであるが、機械も非常に有効な「道具」として見ることができる。(L・モホリ＝ナジ「ヴィジョン・イン・モーション」)

IT 産業による社会生活の変化が見られる現代において、技術革新による新たな道具や材料を使用する方法を考える際、機械産業による社会生活の変化が起こった 19～20 世紀に活躍したバウハウスの教授である L・モホリ＝ナジの思想は示唆的である。彼は、「人間が、知性と感性の統合、透徹する思考と深遠な感情の協調によって、その能力をあますところなく発揮できるような完全な生活に到達すること、これが人間の歴史的な努力に他ならない。この目標に達すること、つまり、知ることを感じ、感ずることを知るようになること」は、現代

の課題のひとつである。」(「Vision in Motion」)とし、造形教育における機械を扱う指導について「空間と時間」の記録の問題から分析を試みている。L・モホリ＝ナジが絵画及び写真、彫刻、動画で行った実践研究資料を基に、

1) 現代の映像メディア表現の造形理論の展開

2) 先端的な技術及びツールにおける造形が、見えないものに形を与え、その形が私たちの美意識や感情を知ることがかりとなること

これらをふまえ、映像メディア表現指導の基礎理論の構築を目指すこととした。

また新たなメディアの指導法やその教育的意義が確立されていなければ、学校現場の教師が指導に取り入れることに消極的になりがちになるため、その一助となる基礎的な研究として構想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、様々なメディアが道具として私たちの表現の可能性を広げている現代において、創造性を育む美術教育における映像メディア表現の指導方法を理論化することである。

すなわち道具や機械が造形表現の有効なツールとなることについて、バウハウスの指導者であった L・モホリ＝ナジの研究より考察を行い、単なる機材の技術的指導に偏ることなく、芸術表現(アート)に共通する色彩や光の機能的価値の視点と感情面を結びつける指導方法を構築すること、知性と感情の統合された表現を生み出す映像メディアの扱い方について、理論と実践を取り入れ明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究では、道具や機械が造形表現の有効なツールとなることについて、L・モホリ＝ナジの造形理論をもとに、美術教育における映像メディア表現の指導の基礎を理論化する。造形を色彩と光による「空間 時間」の解釈の問題としてとらえる彼の理論に基づき、中学校美術科、小学校高学年の図画工作・美術科授業におけるメディアを用いた造形教育内容を検討した。その際、映像メディアの美術教育における造形素材としての可能性について以下 2 点から検討した。

1) 誰もが映像メディアをもとに自分を表現できるか(その人らしさ・その感情が現れる媒体なのか)

2) 映像メディア表現を通して新たな造形的な見方の獲得が可能か

最終的に作品に自らの感情が現れているかを判断するためには、制作過程に制作者の判断・気質(感性・身体性)を必要とする場面があることが重要である。そこで、素材としての可能性を考える上で授業の過程を重視し、観察した。観察はビデオカメラ数台を

用いた参与観察を行った。また、絵や彫刻など他のメディアにそれぞれの造形的な見方の獲得があることが例証されているように、映像メディアがもたらす思考(「空間 時間」)が現代社会を生きる力になるかについて考察した。本考察は映像メディア表現の教育的意義を考える上でも重要な点になる。

具体的には、L・モホリ=ナジ著『Vision in Motion』の文献資料を基に、映像メディア表現を扱う上での造形理論を考察した。造形が見えない意識下のものに形を与え、その形が私たちの美意識や感情を知る手がかりとなるという前提をふまえ、機械を扱う指導について「空間-時間」の問題を中心に整理した。これらの内容をふまえ、授業実践方法を検討、構築した。

文献調査で整理した理論およびL・モホリ=ナジの制作を通したツールの分析の方法を参照し、実際に映像制作の実験を行った。制作を通して、視覚的にももの見え方を変容させ感性に応じて意味ある形に作り上げる映像メディア表現の技法を示した。特に視覚芸術における色彩と光による「空間 時間」の解釈の問題を軸に、デッサンと色彩演習の方法、映像メディアツールとしてのカメラ機能の活用を分析、考察した。考察結果を基に、画面が静的な面から動的な空間へと変容するダイナミズムを作品として実感できる造形教育内容の検討を行った。画面に形態を現出させ、それらを移動・回転させる手法、色の変化するなど静止画面に「動き」を加える方法、仮想空間を作り上げる時のテーマの問題、造形の「動き」と「インタラクティブ性(鑑賞者が動きを発動させること)」の総合的な表現指導を可能にするソフト及び制作環境等を検討した。

上記とは別に新たに新たに小学校高学年、中学校において海外児童生徒とのインターネットを介した交流図画工作・美術科授業を実践し、メディアを用いた表現の指導方法について検討した。言葉を超える他者との美術表現の交流が表現者自身の感情を意識させる活動となることが予想され、広く世界に発信できるメディアの特性をもとに、日本以外の子どもたちとの交流(含異文化交流)を通して表現を考える教育内容を検討した。

4. 研究成果

本研究では、L・モホリ=ナジのシカゴデザイン研究所での教育研究活動に関する文献調査を行い、色彩と光による「空間-時間」の解釈の問題としてとらえる彼の造形理論を基に、中学校美術科、小学校高学年の図画工作科授業におけるメディアを用いた造形教育内容を検討した。L・モホリ=ナジ著『Vision in Motion』及びG・ケペッシュ著『Language of Vision』等文献資料から、写真、動画における造形実験をまとめ、光、色彩、形、線、面、ヴォリューム、動き、テクスチャー、時間、音、視覚の軸等、材料操作

の捉え方の分類と作品制作における感情の統合の方法について理論を整理した。視覚情報の豊かな現代において「創造性」を核とした造形表現指導の重要性、及び、感性を媒介としたコミュニケーション手段としての「視覚言語」概念を用いた映像に関する造形理論の提案を行い、これらの成果を美術科教育学会第39回静岡大会で発表した。

また映像メディア表現に関わる現在の動向や教育に関する資料を、カルフォルニア州アナハイムで開催されたシーグラフ43回大会、国内での学会大会、山口芸術情報センターにて収集した。そこで紹介された最新のインタラクティブアートの実践を大学附属の小学校図画工作科授業に取り入れ、子どもの興味や発想の深まりにかかわる映像メディア教材の検討を行った。

中学校でのメディア表現授業実践の分析を行い、中学生の個性が表れるストップモーション・アニメーション題材についての指導方法を提案した。この成果を第35回 Insea大邱大会(韓国)で発表した。また、上記中学校での実践及び大学生へのコンピュータ・アニメーション授業での成果や舞台での映像制作をもとに「映像メディア表現の指導」について天津大学王学仲研究所で講演を行った。その際、中国語翻訳でのパワーポイントを作成し発表した。さらに、台湾屏東大学で開催された美術デザイン国際学会で、「新たなメディアを用いた表現とその指導方法について」の考察を発表した。

映像メディア表現の技法を段階的に示すための制作実験の成果として、平成30年3月に大阪海岸通りギャラリーで作品「KAMISUKI」を発表した。(平成30年度『美術科研究』掲載)画像が静的な面から動的な空間へと変容するダイナミズムを複数の和紙にプロジェクションする方法で実現した。造形教育内容としての映像メディア表現で検討すべき論点として、静止画に動きと奥行き(空間)を生み出す方法を整理した。また、この映像メディア表現を活用したインタラクティブな授業を計画し実施した。これらの成果を、平成30年6月に高雄市教育局主催の芸術と美感教育の国際大会「2018 Art and Aesthetics International Forum」の講演会にて発表した。

また、インドの小学校と大学附属小学校、大学附属中学校とでビデオ交流授業を実施し、メディアを活用した指導方法の構築に向けた試行を重ねた。

成果の内容としては、授業実践の検討から子どもたちは映像メディアをもとに自分らしさやその時の感情を表現している点、映像メディア表現を通して空間・時間に対する造形的な見方を獲得し深めている点を確認し、美術教育における映像メディアの造形素材としての可能性を言及した。今後は、映像メディア表現に関する授業事例を更に収集し、子どもの精神の発達との関連性について明

らかにしていきたい。

研究者番号：30549100

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 渡邊美香 神代修 出野文莉 加藤可奈衛、「美術教育講座・教育研究創造力アップ・グローバル・プロジェクト報告(3)」、『美術科研究』、査読無、35号、2017、29-34

2. 渡邊美香 出野文莉 加藤可奈衛、「美術教育講座・教育研究創造力アップ・グローバル・プロジェクト報告(2)」、『美術科研究』、査読無、34号、2016、39-46

〔学会発表〕(計5件、うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 渡邊美香、“An instruction of the method for dealing with image media expression in art education”、2017 International conference on arts and design National Pingtung University(招待講演)(国際学会) 2017年

2. 渡邊美香、「映像メディア表現の指導について」、『天津大学王学仲研究所(招待講演) 2017年

3. 渡邊美香 首藤友子、“A theory and instruction of the method for dealing with Image media expression in art education”、The 35th world Congress of the International Society for Education Through Art (InSEA 2017) (国際学会) 2017年

4. 渡邊美香、“The current state of the international exchange through art education in Japan ;In the case of the creative global project of Osaka kyoiku University”、2016 International Conference on New media creation, Visual communication design and Art exhibition (招待講演)(国際学会) 2016

5. 渡邊美香、「美術教育における映像メディア表現の扱い方に関する理論について」、『美術科教育学会、2017

〔その他〕

アウトリーチ活動、ホームページ等

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~mwatanab/activities.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 美香 (Watanabe Mika)

大阪教育大学・教育学部・准教授